

## ドイツ語の心理動詞における 出来事概念化について

野上 さなみ

### 0. はじめに

心理動詞は、感情・心理の持ち主である EXPERIENCER と、その感情・心理の対象となる STIMULUS という二つの主題役割の関係性を叙述する動詞である。本論で中心的に取り扱うのは、ドイツ語の心理動詞のうちで再帰代名詞 *sich* を伴う動詞構造である。まず第1節で、このタイプの心理動詞とその他の心理動詞の両方を紹介し、*sich* を伴う心理動詞構造の特徴を示す。第2節では、統語的に同一の形式を持つ反使役動詞構造とこの心理動詞構造を対照し、再帰代名詞を伴う構造全体の中での心理動詞構造の占める位置を考察する。最終的には、両者ともに自動詞化のプロセスのひとつとして捉えられることや、それぞれが成立するための意味論的条件の相違、また成立する際の、基本動詞の外項の取り扱い方がどのように異なるのかを明確にする。

### 1. ドイツ語の心理動詞

他の言語と同様に、ドイツ語においても EXPERIENCER と STIMULUS のいずれを主語とするのかによって、心理を叙述する動詞にはいくつかの統語的パターンがある。大きくは他動詞によるもの、自動詞によるものの2つに分けられる。他動詞を用いるパターンは再帰代名詞 *sich* との関連でさらに3グループに分かれるので、心理動詞は大きく次の4グループに分類できる<sup>【注①】</sup>。まず(1)は他動詞用法しか持たないグループで、*sich* を用いた再帰型構造<sup>【注②】</sup>は持たない。(2)のパターンは、他動詞用法と再帰型構造の交替が認められるグループである。(3)のパターンは、再帰型構造でしか用いられない動詞、あるいは基本となる他動詞と再帰型構造の両方があっても両者の意味が異なるもの、(4)は純粹な自動詞である。なお、(1)の他動詞用法しか持たない動詞群は、EXPERIENCER (EXP) と STIMULUS (STIM) のどちらが主語として実現されるかによって2つに下位区分される。ドイツ語の心理動詞の一覧を以下に示す：<sup>【注③】</sup>

(1) 他動詞用法のみ

- ・ *beleidigen* (侮辱する), *enttäuschen* (落胆させる) → 主語=ST
- ・ *vergessen* (忘れる), *bereuen* (後悔する), *lieben* (愛する) → 主語=EX

(2) 他動詞用法 (主語=ST) と再帰型構造 (主語=EX) の交替があるもの【注①】

*ärgern* (怒らせる), *langweilen* (退屈させる), *aufregen* (興奮させる)

(3) 他動詞用法と再帰型構造 (主語=EX) で意味が異なるもの

*sich schämen* (恥じる), *sich sorgen* (心配する)

(4) 自動詞用法しか認められないもの (主語=EX)

*verzweifeln* (絶望する), *zögern* (ためらう)

本論文で特に詳しく分析するのは、(2) のグループに属する再帰型構造である。(2) のパターンの基本動詞とそこから派生する再帰型構造の関係を確認しておこう。このパターンでは、STIMULUS と EXPERIENCER のうちどちらが主語として実現されるかによって、この2つの主題役割を担う名詞句の間に交替が起こる：

- ① *Die Nachricht* STIM *ärgerte ihn* EXP.                      そのニュースは彼を怒らせた。
- ② *Er* EXP *ärgerte sich über die Nachricht* STIM.              彼はそのニュースに怒った。
- ③ *Er* *ärgerte sich und seine Mutter*.                      \*彼は怒り、母親を怒らせた。

①の他動詞用法では、主語である STIMULUS が直接目的語である EXPERIENCER の心理的变化を引き起こすいわゆる CAUSER (使役主) の主題役割をも同時に担っているのに対して、②は再帰代名詞を含んではいるものの、この *sich* 自体は動詞の項としてのステータスを持たず、何らかの対象を指示する機能は無い。この事実は③において、再帰代名詞と別の名詞句が共起できないことから判断できる【注②】。したがって例文②では、主語・直接目的語名詞句の間には意味論的に再帰性というものも成立せず、主語となった EXPERIENCER は『自らを興奮させる CAUSER』ではない。同じパターンで心理他動詞から再帰型構造が派生する別の例も見てみよう：

- ④ *Die Zukunft* *ängstigt ihn*.                                  → ④' *Er* *ängstigt sich vor der Zukunft*.  
将来が彼に不安を与える。                                  彼は将来に関して不安を覚える。
- ⑤ *Der Film* *langweilte sie*.                                      → ⑤' *Sie* *langweilte sich mit dem Film*.  
その映画は彼女には退屈だった。                              彼女はその映画に退屈していた。
- ⑥ *Musik* *interessierte meinen Sohn*.                        → ⑥' *Mein Sohn* *interessierte sich für Musik*.  
音楽は私の息子の興味をひいた。                              私の息子は音楽に興味を示した。
- ⑦ *Ihr Verhalten* *wunderte ihn*.                                → ⑦' *Er* *wunderte sich über ihr Verhalten*.

彼女の態度は彼をいぶかしがらせた。

彼は彼女の態度をいぶかしがった。

どの例も、意味論的・統語的に同一のパターンによって再帰型構造が派生しているのがわかる。基本動詞で主語であった STIMULUS / CAUSER (斜体表示) は、再帰型構造では太字で示したとおり、動詞ごとに特定の前置詞を伴って実現される。一方基本動詞で直接目的語だった EXPERIENCER (下線表示) は再帰型構造では主語として実現され、さらに直接目的語として再帰代名詞 *sich* が新たに現れる。基本動詞と *sich* の付加によってできあがる再帰型の心理動詞構造 (以後『再帰型心理動詞構造』と呼ぶ) それぞれの語彙意味論的構造 (lexikalisch-semantische Struktur, 略して『LSS』と呼ぶ) を以下のように表記する: [注⑩]

- (a) CAUSE (x, BECOME (PSYCH (y)))                      (b) CAUSE (x, PSYCH (y, x))  
(a') **BECOME (PSYCH (y))**<sup>PREP(X)</sup>                      (b') **(PSYCH (y))**<sup>PREP(X)</sup>

上段が基本動詞の LSS を、太字で記した下段が派生する再帰型心理動詞構造の LSS を示している。CAUSE は「使役関係」を、BECOME は「状態変化」を、PSYCH は複数の項の間あるいは単独の項にみられる「状態」を、それぞれ表している。文全体がある「心理状態 (PSYCH)」への「変化 (BECOME)」を含む例 (*aufregen, ärgern* など) もあれば、文脈によって変化を含まず「心理状態 (PSYCH)」を叙述するにとどまる例 (*langweilen, wundern* など) もあるので、表記も“BECOME”を含むヴァージョンと含まないヴァージョンの2つに分けた。再帰型心理動詞構造は、統語論的には他動詞構造を保っているけれども、直接目的語である再帰代名詞 *sich* が指示対象を持たず動詞の項としてのステータスも持たないので、意味論的には主語と前置詞句を伴った自動詞構造である。この再帰型心理動詞構造の派生を EISENBERG (1999 : p.279) に従い、一種の『自動詞化』として捉えることにする。再帰型心理動詞構造では、使役の概念 CAUSE が削除され、基本動詞では CAUSER だった STIMULUS=X は前置詞句を伴って、EXPERIENCER=Y の心理状態 (PSYCH) を補足する要素と捉え、“PREP (X)”として“PSYCH”のカッコに対して外付けにした。前置詞句を PSYCH の内部に組み込まずオプションに外付けの形を選んだのには理由がある。まず、HELBIG&SCHENKEL (1991)によれば、これらの前置詞句は再帰型構造によって要求される補足成分 (Ergänzung) として取り扱われている。さらに、その表現上の実現が必須 (obligatorisch) とされているのは *sich interessieren* だけで、ほかは任意 (fakultativ) とされている。この2点から、前置詞句によって表される要素は LSS に含まれるけれども、直接の表現は強制されないものと考えことにしたい。そして、この表現上の『任意性』を明確に示すために前置詞句に相当する要素を状態叙述“PSYCH”の内部に組み込まないことにした。

この LSS を用いれば、特定の STIMULUS を指定することがないと考えられる構造、つまり意味の中に STIMULUS そのものを内含しないと考えられるタイプの再帰型心理動詞構

造も説明することができる。この点については第4節で詳しく述べる。

## 2. 再帰型構造のいろいろ

再帰代名詞 *sich* を用いた構造は、再帰的な出来事の表現だけにとどまらず複数の意味を持っており、第1節で紹介した再帰型心理動詞構造もその中に含まれる一例である。本節では『*sich* を伴う構造』の全体像を紹介し、その中で再帰型心理動詞構造が占める位置を考えていきたい。その際、これと類似したプロセスで作られる反使役動詞構造との関係も詳しく見てゆく。まず、STEIBACH (2002 : p.54) による再帰代名詞 *sich* を含む構造の4つの解釈を以下に挙げる：

構造全体の解釈	例文	日本語訳
I ① reflexive	Otto wäscht sich.	オットーは自身を洗う。
II ② middle	Das Buch verkauft sich gut.	この本はよく売れる。
③ anticausative	Die Tür öffnet sich.	扉が開く。
④ inherent reflexive	Otto erkältet sich.	オットーは風邪をひく。

この4つの解釈は、再帰代名詞が指示対象を持つかどうかによって、すなわち再帰代名詞が基本動詞の項としてのステータスを持つかどうかによって大きく2つのグループに区別される。再帰代名詞に項としてのステータスがあれば、*sich* を他の指示対象で置き換えることができる。①～④の再帰代名詞を別の直接目的語で置き換えてみると、①'以外はこの置換を受け入れないので、①の再帰代名詞だけが項としてのステータスを持つ：

I ①'	Otto wäscht <u>Maria</u> .	オットーはマリアを洗う。
II ②'	*Das Buch verkauft <u>seinen Autor</u> gut.	*この本はその著者をよく売る。
③'	*Die Tür öffnet <u>das Fenster</u> .	*扉は窓を開ける。
④'	*Otto erkältet <u>seine Tochter</u> .	オットーは娘に風邪をひかす。

①では、*sich* が主語名詞句と同一の *Otto* という対象をきちんと指示しているために、文全体が、主語の *Otto* が「自分自身を洗う」という意味になり、意味論的にきちんと再帰性を伴った典型的な再帰動詞の用法を表す。これに対して II に含まれる②～④の例文は、*sich* がいかなる対象も指示していないために、意味論的には再帰性を含まない。

KAUFMANN (2003) もこれと類似した分類を提案しているけれども、両者とも第1節で紹介した再帰型心理動詞構造の位置づけについては、直接言及していない。そこで、本論では現在までに与えられている『再帰代名詞 *sich* を含む構造』の分類一覧に、再帰型心理動詞構造を加えることを試みたいと思う。結論から言えば、③anticausative (反使役解釈)

の位置に別のカテゴリーを立て、その下位区分として反使役動詞構造と再帰型心理動詞構造が並列する形を提案したい。次節でこれら二つの動詞構造の共通点や相違点を検討し、再帰型心理動詞構造の位置づけを進めてみたいと思う。

### 3. 再帰型心理動詞構造 vs. 反使役動詞構造

反使役動詞構造でも、再帰型心理動詞構造の場合と同様に、基本動詞で直接目的語であった項（下線で表示）が派生した構造の主語となり、新たに再帰代名詞が直接目的語として現れる：

- |  |                  |
|--|------------------|
| ⑧ <u>Ihr Haarknoten</u> löste sich immer wieder auf. | 彼女の結った髪はたびたび解けた。 |
| ⑨ <u>Die Schranke</u> hebte sich langsam.            | 遮断機はゆっくりと上がった。   |
| ⑩ <u>Die Situation</u> veränderte sich grundlegend.  | 状況は根本的に変わった。     |

さて、両者の派生の統語的パターンは同一であるが、使役主の主題役割を担う基本動詞の外項の取り扱い方に相違があることを確認しておく。STEINBACH(2002)によれば、基本動詞から反使役動詞構造が派生する際には、Valency reduction が起こり、基本動詞の外項＝使役主の役割を担っていた項が完全に意味から削除される【注①】。その結果、使役主は出来上がった構造の表す意味に内含されることはない。上の例文に関して言えば、叙述されているのは、主語に関して自律的に起こった出来事のみであり、この出来事を引き起こす原因となる使役主は（実際には存在するにせよ）構造自体の意味には一切含まれていない、ということである。つまり反使役動詞構造においては、代名詞 *sich* が基本動詞の外項削除を標示する役割を担うと捉えることができる。このことを踏まえつつ、基本動詞とそこから派生する反使役動詞構造の LSS を、再帰型心理動詞構造の LSS と比較してみよう。いずれも上段に基本動詞、下段に太字で再帰型構造の LSS を表し、【2】① は EXPERIENCER の状態変化を含むパターンを、【2】② は含まないパターンをそれぞれ表している：

- |   |                                      |
|---|--------------------------------------|
| 【1】反使役動詞構造の生成プロセス                           | CAUSE (x, BECOME (BE (y)))           |
|   | <b>BECOME (BE (y))</b>               |
| 【2】再帰型心理動詞構造の生成プロセス                         |                                      |
| ① CAUSE (x, BECOME (PSYCH (y)))             | ② CAUSE (x, PSYCH (y,x))             |
| <b>BECOME (PSYCH (y))<sup>PREP(x)</sup></b> | <b>(PSYCH (y))<sup>PREP(x)</sup></b> |

【1】と【2】の共通点として、*sich* を伴う再帰型動詞構造では「使役の概念＝CAUSE」が削除されている点が挙げられる。反使役動詞構造の場合には使役の概念とともに使役主の役割を担っていた外項そのものも削除されるため、使役主の存在自体がもはや含意される

ことはない。これとは対照的に再帰型心理動詞構造では、基本動詞の外項 *x* 自体は LSS の内部にとどまったままである。ちょうど受動態を作る場合にも、これと類似した現象が見られる。受動態では、基本動詞の外項にあたる「行為者・原因」は、直接表現されないことも多い。だからといって「行為者・原因」がまったく動詞句の意味内に含意されていないのではなくて、単に抑制されるかたちで表層の表現に実現されないまま済まされるケースが多いということである。「行為者・原因」は前置詞 (*von* や *durch*) を伴って現れることも可能であるが、この実現は受動態において必須事項ではない。

ただし、受動態において抑制されている「行為者・原因」と、再帰型心理動詞構造の LSS に依然として残っているこの項 *x* の相違は、派生の段階でその解釈が変化するかどうかという点にある。再帰型心理動詞構造の項 *x* は、基本動詞の LSS にあったときとは異なる解釈を受けている点に注目したい。第 1 節で紹介したとおり、再帰型心理動詞構造では基本動詞の外項を実現するために様々な前置詞が用いられており、すべての例を通して単一の前置詞に統一されているわけではないが、それぞれの動詞ごとに特定の前置詞が選択されている。しかし、これらの前置詞の中には行為者や原因といったいわゆる CAUSER を表現する際に用いられる *von* や *durch* は含まれていない。これに対して反使役動詞構造において、既に削除してしまった「出来事の原因」にあえて直接言及する場合、受動態で抑制された CAUSER に言及する場合に用いられる前置詞 *durch* が選択される。DUDEN, Deutsches Universal Wörterbuch (1996) には次のような例が載っている：

- ⑪ Das Fenster öffnete sich *durch den Luftzug*. 隙間風で窓が開いた。

この例文における *den Luftzug* という項は、選択された前置詞が *durch* であることから、動詞句によって叙述される出来事の引き起こし手、つまり CAUSER の主題役割を担うものとして解釈されていることが確認できる。つまり、項 *x* の意味論的解釈は基本動詞と反使役動詞構造の両方において、変化することなく一貫して『CAUSER』に統一されており、反使役動詞構造ではそれが単に LSS から削除されたに過ぎない、ということである。

これに対して、再帰型心理動詞構造では、動詞ごとに選択できる前置詞が *durch* 以外のものにすでに指定されてしまっている。このことから、基本動詞では CAUSER として解釈されていた外項 STIMULUS が、*sich* の付加によって出来上がった構造内ではもはや CAUSER としての解釈を受けていないと考えることができる。さらに、この解釈の変化は外項に関してのみ起こるのではなくて、叙述される出来事全体に関わるものと考えべきである。つまり基本動詞と再帰型心理動詞構造とは、同一の出来事が叙述されているにも関わらず、それをどのように概念化し把握するのか、そのあり方が両者の間で異なるために、項のレベルでも解釈に相違が生じるわけである。具体的には、基本動詞では、STIMULUS が EXPERIENCER の内部に特定の心理を引き起こす現象として出来事を捉え叙

述している。その結果これは統語面でも他動詞としての形式になる。ここでは出来事が STIMULUS から出発して EXPERIENCER で終結すると捉えられている。これに対して、再帰型心理動詞構造では、この『引き起こし』つまり使役の概念は LSS から削除され、EXPERIENCER の中に STIMULUS に関する特定の心理が存在することを叙述している。つまり、STIMULUS はもはや出来事の出発点としては捉えられていない。こちらも依然として統語的には他動詞の形式を取ってはいるが、再帰代名詞自体が指示対象を持たないために項としてのステータスが認められず、意味論的にはごく自動性の強い構造として捉えることができる。

さらに、反使役動詞構造をつくるためには、ある意味論的条件を満たさなければならない。例文⑫・⑬が示すとおり、基本動詞の外項が『意図』を備えた存在でしかあり得ない場合には、反使役化が許されず、出来上がった構造は中間態の解釈しか受け入れない (STEINBACH : 2002) :

- ⑫ a. Peter / dieser Schlüssel / der Sturm hat die Tür geöffnet.

ペーター / この鍵 / 暴風 が扉を開けた。

- b. Die Tür öffnet sich leicht. → 中間態解釈・反使役解釈両方が有効

扉は少し開く。あるいは 扉は簡単に開く。

- ⑬ a. Peter / \*dieser Stift / \*der Wind hat dieses Bild gezeichnet.

ペーター / \*この鉛筆 / \*風 がこの絵を描いた。

- b. Das Bild zeichnet sich leicht.

この絵は簡単にかける。 → 中間態解釈のみ有効 (反使役解釈は無効)

意図を備えることは『典型的な主体性』のひとつに含まれる (DOWTY : 1991) ことから、反使役動詞構造を作るための外項削除は、主体性がある程度低い項に限って許される、と結論付けることができる。これに対して、再帰型心理動詞構造を派生させる場合には、基本動詞の外項に意図性が含まれるか否かによって派生の是非が左右されることはない。派生の際に削除されるのは、外項の存在そのものではなく使役の概念のみであるため、項の備える意図性が派生の是非に影響を与えないと考えることができる。

#### 4. STIMULUS の含意

これまでの考察で、反使役動詞構造の派生は、基本動詞の外項削除のプロセスであるのに対して、再帰型心理動詞構造の派生は、同一の出来事を、基本動詞とは異なる概念化の仕方です捉えなおすプロセスであることを述べてきた。さらに後者においては、STIMULUS に相当する項が削除されることなく LSS に含まれると考えてきた。しかし次のような例において、STIMULUS に当たる項は果たして、派生した構造の LSS に含意されていると言え

るのであろうか？

⑭ Amüsiere dich **an der Party** !

パーティーで楽しんでおいで！

⑮ Sie langweilte sich ganzen Tag.

彼女は一日中退屈していた。

*sich amüsieren* という構造は、前置詞句 *über* と共起する場合とそうでない場合において、既に意味内容に違いが認められ、1. 時間を楽しんで過ごすという意味と、2. 特定の対象を面白がる、おかしがるという意味の 2 種類に分化している点に注目すべきである。前置詞 *über* を選択しなければならないのは 2. の意味で用いられる場合であり、1. の意味でこの再帰型構造が用いられる場合には、もはや心理の引き起こし手としての STIMULUS に当たる項は LSS の内部に含まれているとは言えないのではないだろうか。もし⑭のように別の前置詞と組み合わせたとしても、Party そのものは楽しいという心理の直接の原因というよりも、むしろ出来事が展開する舞台としての純然たる場所あるいは機会を表している。つまりこの前置詞句は、基本動詞の LSS に含まれていた CAUSER としての STIMULUS が、心理状態 PSYCH を補足する要素として再帰型心理動詞構造の LSS に引き継がれたものというよりも、まったく新たに LSS に持ち込まれた修飾句として捉えるべきであろう。この場合、PREP(x)に相当する部分は再帰型構造が派生する時点ですでにいったん欠落し、まったく別の前置詞句が導入されたものと解釈できる。

*sich langweilen* も同様で、特定の STIMULUS が原因となって退屈な気分が起きるといふ状況もあれば、⑮のように漠然と退屈しているという状況もある。後者の場合には、派生後も LSS に含意されている何らかの STIMULUS に直接言及していないだけ、というよりもむしろ、派生する時点で PREP(x)が欠落し、もはや STIMULUS が含意されていない例と考える方が適切ではないだろうか。つまり、反使役動詞構造の派生の場合と同様に、基本動詞の外項が LSS にもはや含まれていないと判断できる例も確認できるということである。

## 5. 再帰型心理動詞構造の位置づけ

反使役動詞構造と再帰型心理動詞構造をひとつのカテゴリーとしてまとめる根拠は、次の 4 点にまとめることができる：① 両者ともに派生の統語的パターンが同一であること、② どちらも再帰代名詞が項としてのステータスを持たないこと、③ そのため双方とも自動詞化のプロセスとして捉えられること、④ 再帰型心理動詞構造においても、項 x が LSS に含まれていないと判断できる例が複数確認できること。しかし、次の 2 点の理由から、両者を同一カテゴリーを構成する 2 つの下位グループとして区別することを提案したい：(1) 構造成立のための意味論的条件に違いが見られること、(2) 両者の出来事概念化のパターンが異なること。この (2) の根拠として挙げられるのは、再帰型心理動詞構造において選択される前置詞に *durch* が見られないことである。反使役動詞構造の生成は



項削除のプロセスであり、再帰型心理動詞構造の派生は、出来事の概念化を変更するプロセスである。

## 6. 結論

再帰代名詞 *sich* を用いて心理を表す他動詞から派生する構造は、統語的に他動詞構造を保持しているが、意味論的には自動詞化のプロセスのひとつと解釈することができる。*öffnen* → *sich öffnen* のような反使役化のプロセスが Valency Reduction によって、使役主の役割を担う項そのものを削除する作用であるのに対して、再帰型心理動詞構造は、使役主という特定の『項』を削除するのではなくて、同一の出来事の「概念化のパターン」を変化させるプロセスである。その結果『使役の概念』のみを LSS から削除することができ、他動詞用法において使役主 CAUSER および STIMULUS 両方の主題役割を担っていた項は、動詞の LSS 内部にとどまることができる。ただし、できあがった再帰型構造ではこの項を含む前置詞句の実現が必須ではないことからわかるとおり、STIMULUS は必須の役割ではない。

ひとつの出来事が、基本他動詞では『STIMULUS : 主語→EXPERIENCER : 対格目的語』という方向に作用する、使役の概念を含む出来事として把握されるが、再帰型心理動詞構造ではあらためて同一の出来事を、EXPERIENCER を出発点とする出来事として捉え直し、対象に関する特定の心理が EXPERIENCER から発生する出来事として叙述することが可能になる。

## 7. 注

- 【注①】 なお本論では、STIMULUS と EXPERIENCER が主格あるいは対格として現れるタイプの心理動詞のみを考察の対象とし、これらが与格として現れるもの、例えば *Das Haus gefällt mir*. (この家は私の気に入っている。) に見られる *gefallen* のような動詞は取り扱わない。
- 【注②】 再帰代名詞 *sich* を伴う形式をまとめて「再帰型構造」と呼ぶことにし、これには、意味論的に再帰性を持つ形式と持たない形式の両方が含まれる。*sich* を伴う心理動詞構造は、主語名詞句から直接目的語名詞句へ作用が及ぶという再帰的な意味を含むわけではない。
- 【注③】 同一の心理動詞で、自動詞用法と他動詞用法の交替が認められる *erschrecken* (驚く・驚かせる) のようなパターンが少数あるが、本論では取り扱わない。なお、(2) のグループには、DUDEN, Deutsches Universal Wörterbuch に、再帰代名詞以外の直接目的語を伴う「他動詞用法」と「再帰型構造」の両方が掲載されているもののみを分類している。
- 【注④】 他動詞用法に対応する日本語訳のみを示す。再帰型構造はこれらから使役の概念を取り除いて、「怒る」・「退屈する」のようになる。
- 【注⑤】 再帰代名詞の項としてのステータスを確認するテストは複数ある。詳しくは STEINBACH (2002: 139), DUDEN(1998)を参照。なお例文③には、ここに挙げた日本語訳とは違う解釈もあり、その

場合には文が成立するため、非文として取り扱ってはいない。詳しくは KEMMER, S. (1994)参照。

【注⑥】 心理動詞の LSS の記述に関しては、RAPP (1997) を参照。

【注⑦】 STEINBACH は、外項が削除されていることを示すテストとして、副詞句 *von selbst* (ひとりで) と共起できることを挙げている。例：Die Tür öffnete sich *von selbst*. (扉はひとりでに開いた。)

## 8. Bibliographie

Dowty, D. R. (1991): Thematic proto-roles and argument selection. In: *Language* 67, p. 547-619.

Duden (1998<sup>6</sup>): Grammatik (Bd.4). hrsg. von Dudenredaktion.

Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich: Dudenverlag

Duden (1996<sup>3</sup>): Deutsches Universal Wörterbuch. hrsg. von Wissenschaftlicher Rat der Dudenredaktion. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich: Dudenverlag

Eisenberg, P.(1999): *Grundriss der deutschen Grammatik Bd.2, Der Satz*. Stuttgart, Weimar: Metzler

Helbig, G. & Schenkel, W. (1991):

*Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben*. Tübingen: Niemeyer

Kaufmann, I. (2003): Infinitivnominalisierungen von reflexiven Verben: Evidenz gegen Argumentstrukturvererbung ? In: Maienborn, C. (hrsg.): *(A)symmetrien, Beiträge zu Ehren von Ewald Lang*. Tübingen: Stauffenburg

Kemmer, S. (1994): Middle voice, transitivity, and the elaboration of events.

In: Fox, B & Hopper, P.J. (eds.) : *Voice, Form and Function*. p. 179-230.

Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins

Steinbach, M. (2002): *Middle Voice: A comparative study in the syntax-semantics interface in German*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins

Rapp, I (1997): *Partizipien und semantische Struktur*. Tübingen: Stauffenburg